



奈良山 -II

平城ニュータウン予定地内遺跡
調査概報

1974.3.

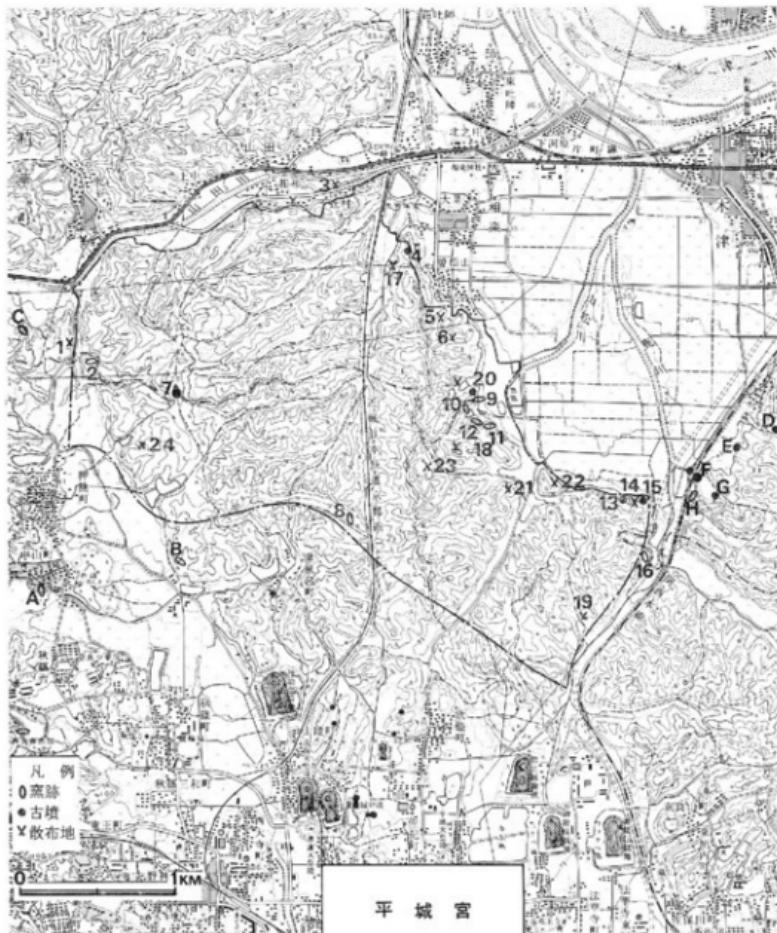
奈良県教育委員会

目 次

I	1973年度の調査について	1
II	調査地点の概要	3
II-1	第21号地点の調査	3
II-2	第22号地点の調査	4
II-3	第23号地点の調査	4
II-4	第24号地点の遺物	4
II-5	第9号地点— ^一 如谷瓦窯—の調査	5
II-6	第4号地点の調査	9

例　　言

- 1 本書は京都府和泉郡木津町、奈良市にまたがって、日本住宅公団がおこなう平城ニュータウン造成計画地内に所在する遺跡の、1973年度の調査の概報である。
- 2 この調査は京都府教育委員会、奈良県教育委員会が日本住宅公団より委託を受けたものを、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ依頼して実施したもので、その調査費用は、日本住宅公団大阪支所の負担による。
- 3 今回の調査は、1964・1965年におこなった分布調査にもとづいて、今後の調査および保存計画を立案するための予備調査であり、1972年度に調査できなかった部分の調査である。調査は遺跡の性格・範囲を知ることに重点をおき、最少限度の発掘にとどめた。
- 4 分布調査をおこなった時点では、ニュータウン計画の事業地範囲が未確定であったため、若干の周辺部を含めて、事業地内に所在する遺跡に通し番号をついた。今回の調査にあたってもこの番号を使用した。なお、24号地点のように新たに発見された遺跡についても、通し番号を付した。
- 5 本書は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部で執筆編集した。



第1図 平城ニュータウン予定地内および付近遺跡分布図

- | | | |
|------------------------|---------------------|-------------------|
| A 中山瓦窯 | B 奈良山51・52号窯 | C 乾谷瓦窯 |
| D 西山塚古墳(円墳) | E 瓦谷古墳(円墳) | F 市坂古墳(円墳) |
| G 上人ヶ平古墳(前方後円墳) | H 市坂瓦窯 | |
- 平城ニュータウン予定地内(一点破線内)に所在する道路(アラビア数字)
については、第1表を参照されたい。

I 1973年度の調査について

日本住宅公團による団地造成計画、およびこれに伴なう予定地内の分布調査、および発掘調査の経過についてはすでに『奈良山一平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』(1973年3月 奈良市教育委員会)に述べたとおりである。

1973年度の調査は、奈良県・京都府の両府県にまたがって、10月18日から11月16日まで行った。

発掘調査は、奈良市歌垣町で3ヶ所、京都府相楽郡木津町で2ヶ所で実施した。この他、数ヶ所で分布確認調査をおこなったが、事業地外であったため、今日の予備調査の対象地からはずした。

以上のニュータウン事業地内所在遺跡とその調査状況は第1表の如くである。

所 在 地	地 点	遺跡の種類	調 査 期 間	調査面積	備 考
京都府相楽郡猪高町松宿	1	瓦 窯			事業地外
" 相和	3	散 布 地			"
木津町曾根山	4		11月15日～11月16日	30m ²	遺構なし
" "	5	寺 墓 ?	1972年		大仙堂 既報告
" "	6	散 右 地			所在未確認
雪舟谷	9	瓦 窯	1953年		2基
			10月30日～11月4日	969m ²	
" "	20	古 墳	1972年		円墳? 既報告
" "	17	散 布 地	1973年		遺構なし 既報告
奈良市押熊町字堂頭	2	瓦 窯 破	1972年		6基 既報告
山陵町当谷	7	石のカラト 古 墳			保存計画
"	8	瓦 窯	1970年		3基 既報告
"	24	散 布 地			
歌垣町	10	須恵器窯	1972年		1基 既報告
"	11	"	1972年		1基 "
"	12	瓦 窯	1972年		6基 "
		須恵器窯	1972年		2基 "
"	13	古 墳	1972年		墳形不明 "
"	14	散 布 地			未調査
"	15	古 墳	1972年		円墳 既報告
"	16	瓦 窯	1952年		1基 事業地外
"	18	散 布 地	1973年		遺構なし 既報告
"	19	"	1973年		遺構なし 既報告
"	21	"	10月18日～10月25日	4,322m ²	遺構なし
"	22	"	10月26日～10月30日	81m ²	遺構なし
"	23	"	10月29日～10月31日	3,137m ²	遺構なし

第1表 半城ニュータウン予定地内遺跡調査一覧表



第2図 第21・22・23号地点付近地形図

II 調査地点の概要

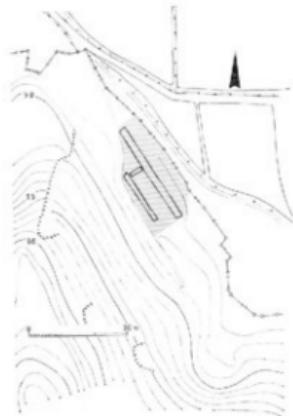
II-1 第21号地点の調査

第21号地点は奈良市歌姬町436・437・438・439・452・453・454・455・456・457番地にわたる山林である。調査は約3m間隔に試掘坑を設定し、遺構があればそれを並張して遺跡の範囲を確認するという方針でおこなった。瓦片や土器片が含まれていたり、木炭を含んだ層が広がりを見せている部分もあったが、試掘坑を拡張した結果では、確かな遺構は検出できなかった。

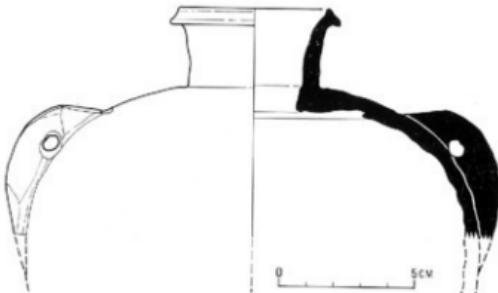


第3図 第21号地点遠景

西から



第4図 第22号地点地形図



第5図 第24号地点出土土器

II-2 第22号地点の調査

第22号地点は奈良市歌姫町1837番地に亘する丘陵北面につくられた畠地である。調査地の中央部に幅約2m、長さ32mの東西トレンチ、および幅1m、長さ17mの東西トレンチを設定した。丘陵傾斜地を整地して畠地にしてあつたため、地表面から地山までの深さは一定でない。南トレンチでは約40cm、北トレンチでは約80cmの深さで地山に達する。この地山上の堆積土には古墳時代の土師器片を含んでいるが、明確な遺構は検出できなかった。

II-3 第23号地点の調査

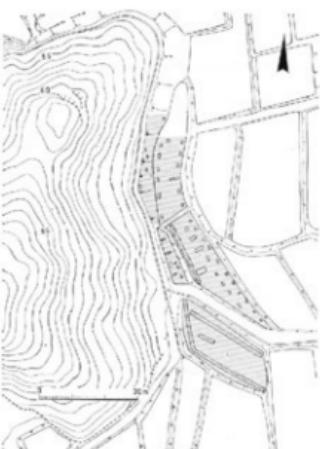
第23号地点は、奈良市歌姫町335-4番地の山林で、昭和48年10月29日から同月31日まで調査を行った。当地でも試掘坑による遺構確認調査を行つたが、遺構・遺物ともに全く検出されなかつた。

II-4 第24号地点の遺物

造成事業の行なわれた地域で、須恵器杯の口縁部2点と灰釉陶器双耳壺1点を採集した。須恵器杯は、破片が小さすぎるため、詳細は不明である。灰釉陶器双耳壺は、丸く張った肩部に一对の耳の付くものである。耳はヘラで面取りし、1ヶ所に円孔を穿っている。内面は全体に赤紫色を呈し、外面には全面に茶褐色の灰釉が施されている。

遺物採集後、数回にわたって現地踏査を行つたが、他に遺物ではなく、遺跡の性格は不明である。

II-5 第9号地点—音如谷瓦窯一の調査



第6図

所に直径8cm程の柱根が残っていた。

なお、A-3 トレンチの灰原の下層で土壌を1ヶ所検出した。灰を殆んど含まない砂質土が堆積しており、ここから多量の土器類とともに少量の瓦類を得た。

A区では造構面が西側の丘陵の傾斜と比してほぼ水平に近く、瓦生産を始めるにあたって何らかの造成を行っていることが知られる。柱穴は工房など生産に関係する施設と考えられるが、トレンチ発掘によるため建物規模・棟数等詳細は不明であり、後の本調査にまちたい。

なお、本年度調査地域外であるが、A区西側の水路で瓦窯1基の存在を確認した。水路が暗渠から開渠に移る部分で、水路の底を清掃した際に検出したものである。水路内にかかった部分だけしか確認できなかったが、窯体の幅約1.6mで、東に焚口部がつくものであろう。当地ではかつて音如谷瓦窯として瓦窯1基が調査されており、今その位置を明らかにし得ないが、調査記録によれば、あるいは現在の暗渠部分にあったものとも推測される。もしそうだとすれば、瓦窯が2基あることになる。いずれにせよ、複数群在することの多い瓦窯のことであり他にも存在する可能性は強い。

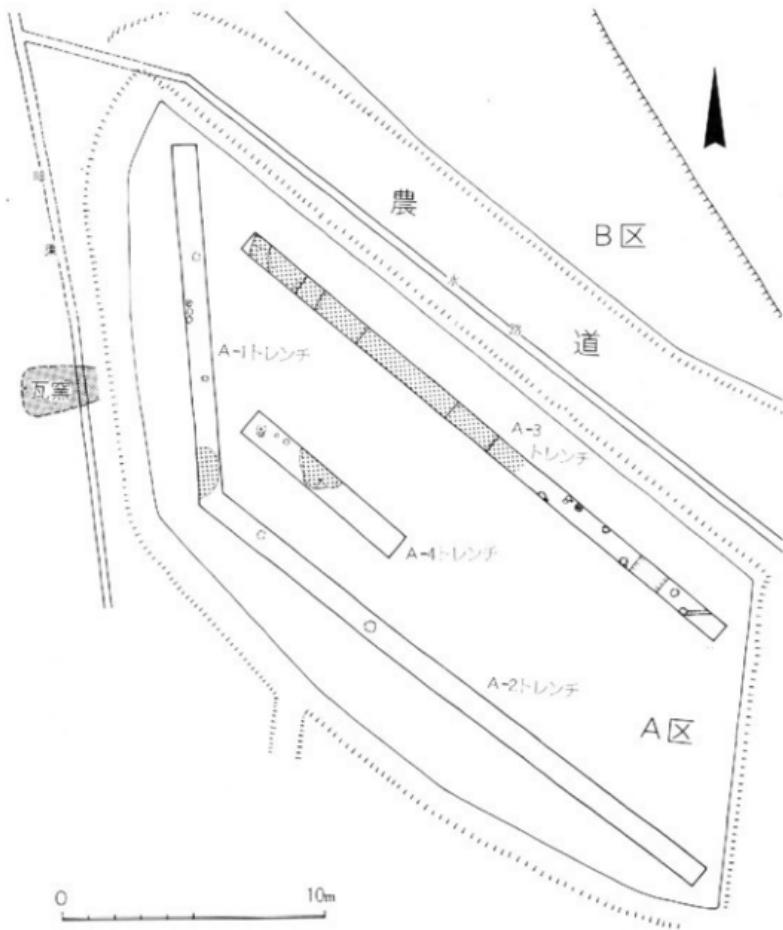
2 遺 物

瓦類 瓦類には、多量の丸・平瓦と若干の軒瓦がある。丸・平瓦は現在なお整理作業を続行しているので、軒瓦について述べる。

軒丸瓦は2型式4個体、軒平瓦は7型式19個体あり、他に型式を識別し得ない小片が軒丸瓦に2個体、軒平瓦に1個体ある。

1 遺 跡

調査地は、音如谷瓦窯に接する水田地帯で、西側の丘陵頂部には音乘谷古墳、谷一つ隔った南方の丘陵には6基からなる歌姫西瓦窯がある。水田一筆毎に南からA・B・C・Dの4区に分け、A区ではトレンチ、B・C・D区では試掘坑によって調査を行った。B・D区では少量の土器類や瓦類を得たのみで造構は検出されなかった。C区では丘陵に沿った幅約50cmの素掘りの溝を1条検出したが、造構の性格は不明である。A区では、幅1mのトレンチを4本、延べ68m設定したなかで、灰原3ヶ所、柱穴19ヶ所、溝2条を検出した。灰原には、灰に混って木炭や窯壁の破片が含まれており、ここから多量の瓦類を得た。柱穴はいづれも一辺20~40cm程度の円形に近い小規模のもので、4ヶ



第7図 第9号地点A区遺跡図



第8図 A-3トレンチ北壁上層図

1は単弁12弁軒丸瓦である。外区には外縁に線鋸齒文を、内縁に珠文をめぐらせる。内区は外区内縁よりわずかに突出しているが、弁区は平坦である。中房に1+5と配した蓮子は高く突出している。胎土にはかなり砂粒を含む。類例は平城宮跡、法華寺阿弥陀浄土院に見られる。2は内区に界線でかこんだ複弁8弁蓮草文を配し、外区内縁に珠文、外縁に線鋸齒文をめぐらせる。内区は突出するが中房を低く作っているため、蓮弁は反転が強く表現されている。瓦当面には範型の木目が明瞭に認められる。胎土には砂粒を多く含んでいる。類例は平城宮跡、東大寺、唐招提寺、法華寺阿弥陀浄土院に見られる。

3~6は均整唐草文軒平瓦である。いずれも外区に珠文をめぐらせる。頭はすべて曲線頭である。4は他遺跡の資料から瓦当上弦幅約22cmに復原でき、小型の軒平瓦である。外区に長円形の珠文をめぐらせるのが特徴的であるが、唐草文様は6と同じ系統に属するものである。類例は大安寺、法華寺阿弥陀浄土院に見られるが、後者は同範品である。3・5・6も法華寺阿弥陀浄土院の発掘調査において同範品が出土している。これらの軒平瓦には全般的に胎土に砂粒や小石を含むものが多い。

これらの他に刻印瓦が1点出土している。約1.5cm四方の刻印を平瓦凹面に捺したものである。「川」と読むこともできるが、ここでは「三」としておく。

以上、出土軒瓦の概要を述べた。今回の調査は予備調査であり、窯体の発掘調査ではないが、法華寺阿弥陀浄土院の遺営に関連する瓦窯であることを確認した意義は大きい。

土器類 灰原下層土壤から多量の土師器と少量の須恵器を得た。土器類はいずれも小片で、土師器では器面が荒れており、全体として遺存状況は良くない。しかしこれらの土器類は一括資料としての性格をもつため、簡単に紹介しておきたい。

土師器 土師器には杯A・杯B・皿A・蓋・鉢A・盤A・片口・高杯・鍋・栗壺・甕がある。このうち杯・皿類が大部分を占める。杯A(1~4)には、口縁部が内側に巻き込むものと、口縁部が外へ張り出すものがある。調整手法にはa・b 2手法があり、口縁部外面を荒削りするものが多い。器面が荒れているため暗文の有無・形態は明確ではないが、内面の底部に螺旋暗



第9図 第9号地点 遠景

東から

文、口縁部に放射暗文を施すものが多い。さらに連弧暗文を施すものもある。杯Bは小片のため詳細は不明である。

皿A（6～8）には、口縁端を内側に折り曲げたものと外反するものがある。a手法によって調整し、放射暗文をもつものがある。

蓋（5）は、円形の偏平なつまみのつくもので、頂部外面を丁寧に挽磨きし、内面には螺旋暗文を施している。

高杯（10）は、浅い杯部に短い脚部のつくものである。杯部内面には螺旋暗文と放射暗文を施し、杯部外面・裾部外面には挽磨きを行なう。脚部内面は挽削りで調整する。

鉢A（12）は、口縁部外面に挽磨きを行ない、内面には渦状暗文を施している。

盤A（13）は、一对の把手の付くもので、口縁部外面には粗い挽磨きを行っている。

片口（9）は、小形のもので、外面を挽削りによって調整する。

鍋（11）は、丸い体部と外反する口縁部からなり、体部の底部近くに三角状の薄い把手一对がつく。

葉巻は、体部に一对の把手がつくものであるが、器面が殆んど剥落しており、原形をとどめない。

壺には、把手のつくものとつかないものがある。いずれも外面は刷毛調整を行っている。他に直径20cmのドーナツ形をした土製品があるが、破片でもあり、原形・用途いずれも不明である。

須恵器 須恵器には、杯A・杯B・皿B・杯B蓋・皿B蓋・盤A・鉢A・瓶・双耳壺・壺がある。杯A（1・2）はいずれも挽切りの後になでて底部外面を調整している。口縁部の形態では、1の端部内側がわずかに凹むのに対し、2では口縁部が外反する。

杯B（3・4）には、挽切りのままで底部外面を調整しないもの（4）と、籠で削って仕上げるもの（3）とがある。

皿B（7）では、底部外面を挽削りで仕上げている。杯B蓋（5）、皿B蓋（6）はともに偏平な宝珠つまみのつくものである。

鉢A（8）は、口縁部の破片であるが、平底ないしはそれに近い底部をもつものであろう。

瓶（10）は、偏平な体部に外反する長い口縁部のつくもので、縁端部は丸い。高台は内端部が突出する。

双耳壺（11）は、肩部に一対と体部下半に1つの合計3耳の付くものである。肩部以下の体部外面を挽削りする。耳は一孔をもち、挽削りで成形した後になでて仕上げている。蓋は小片のため原形不明である。

以上、簡単に説明を加えたが、これらの土器群は平城宮跡出土土器と相似た様相を呈しており、その年代としては、天平末年を少し遡る時期を与えることができる。



第10図 第4号地点遠景

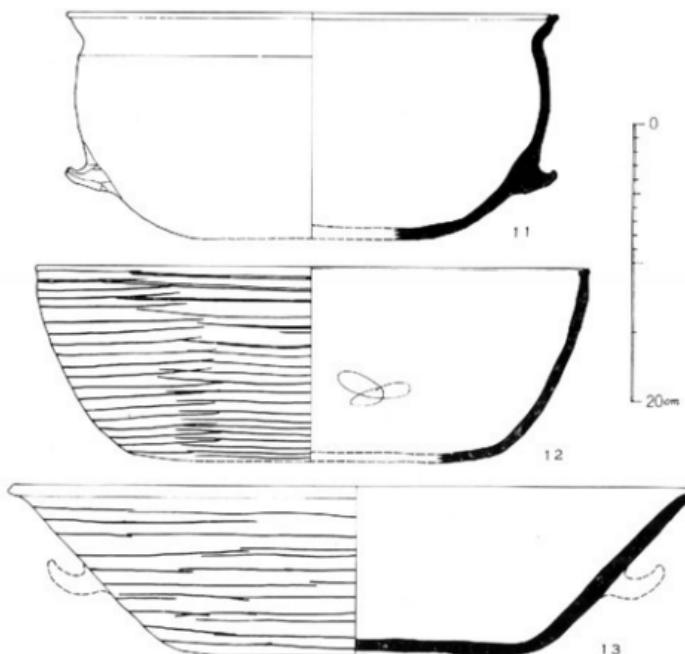
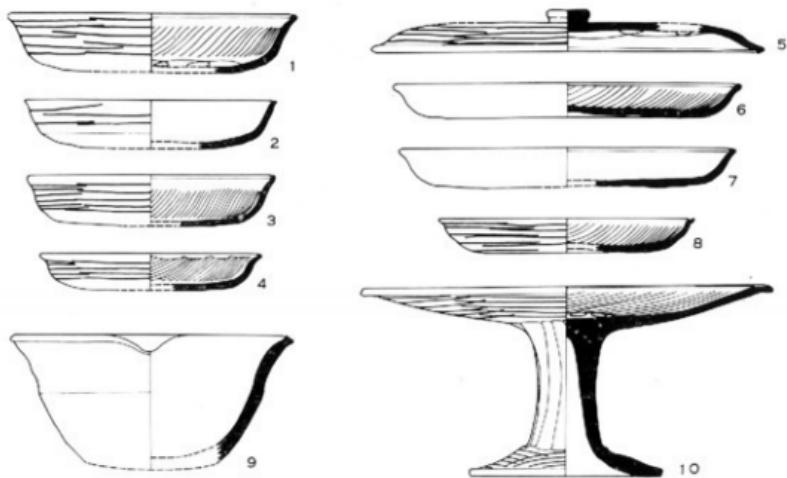
西から

II-6 第4号地点の調査

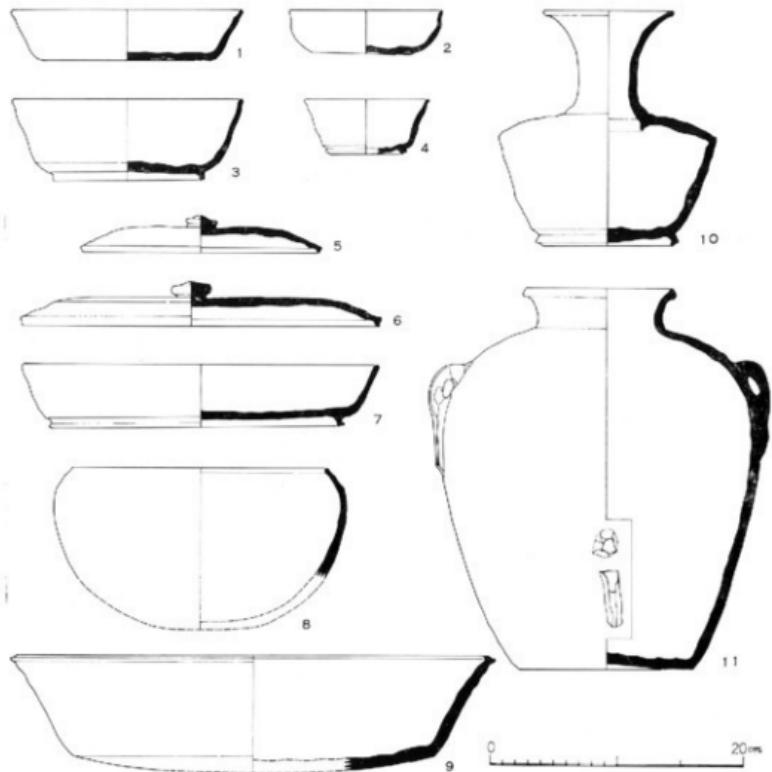
調査地は九頭尾神社境内にあり、社坂西側の丘陵頂部である。丘陵東側が崖になっているため、西側にトレンチを設定した。トレンチは幅1m、長さ各8m、10m、12mである。頂部では約20cm、傾斜部では約70cmで地山に達したが、土器・埴輪等の遺物や、盛土・葺石等の墳丘施設はまったく検出されなかった。



第11圖 第9號地點出土軒瓦

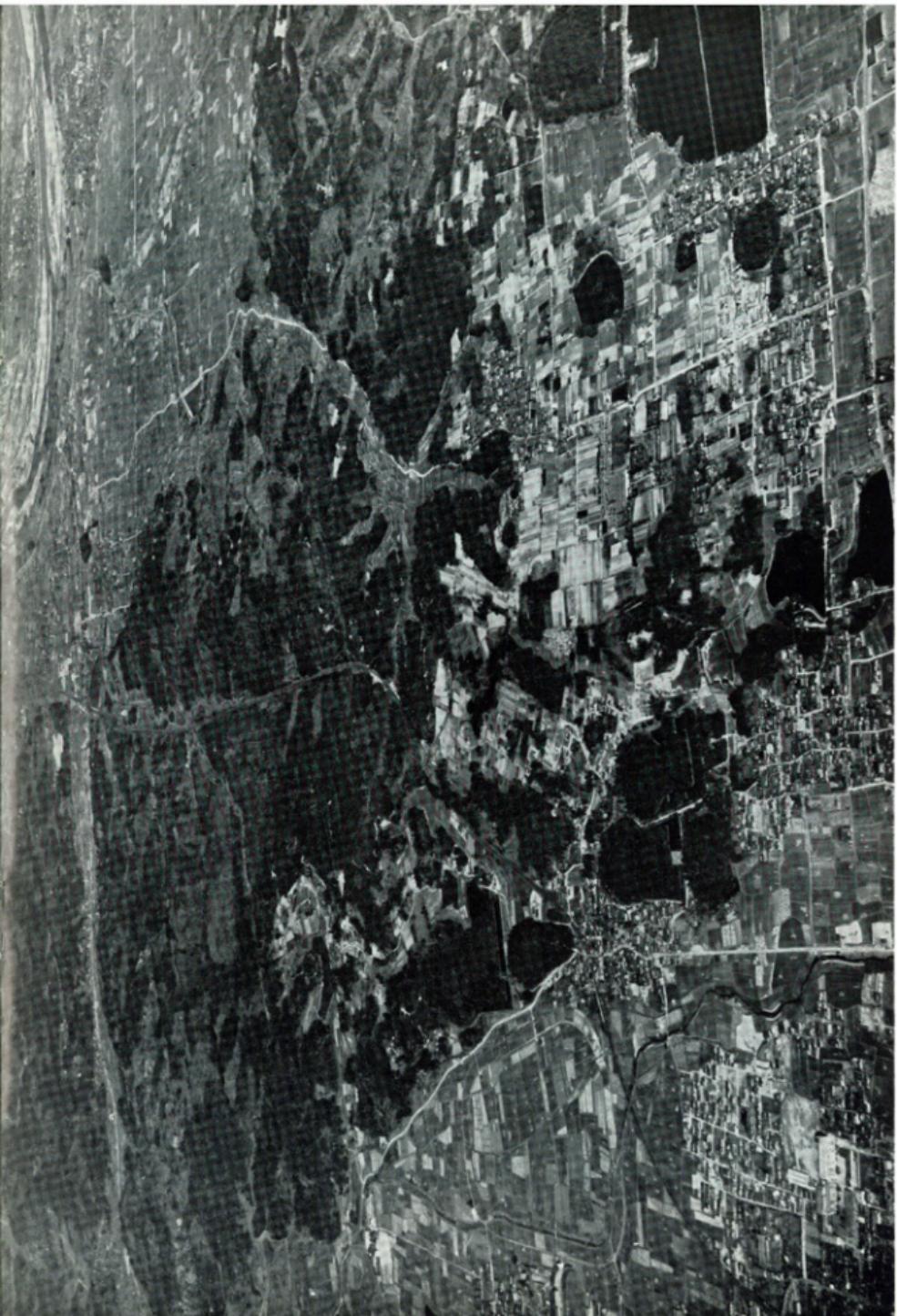


第12圖 第9號地點出土土器



第13図 第9号地点出土須恵器

秦良山丘陵全貌 平城宮上空から



図版 2



1 第 22 号 地点 遺 景

北から



2 第 23 号 地点 遺 景

南から



1 第9号地点調査状況

西から



2 A-4 トレンチ

東南から



3 A-4 トレンチ

北西から

図版4



1 A-1 トレンチ

南から



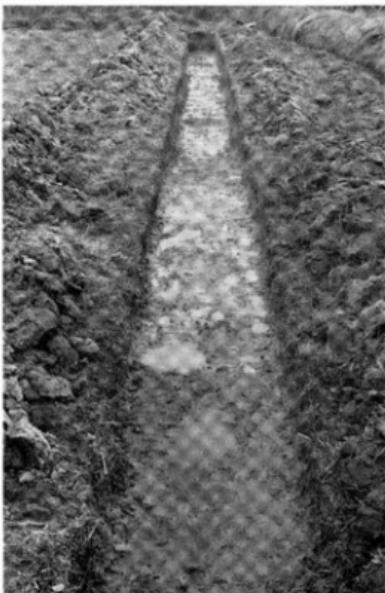
2 A-2 トレンチ

西から



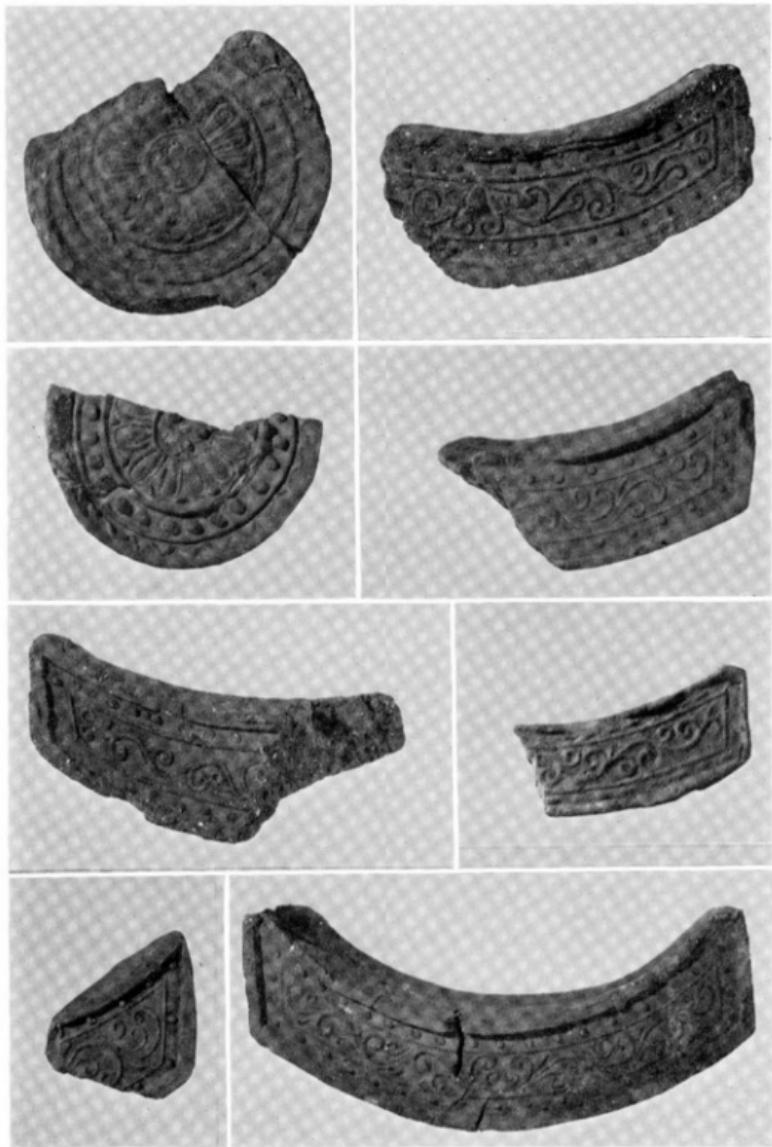
3 A-3 トレンチ

東から



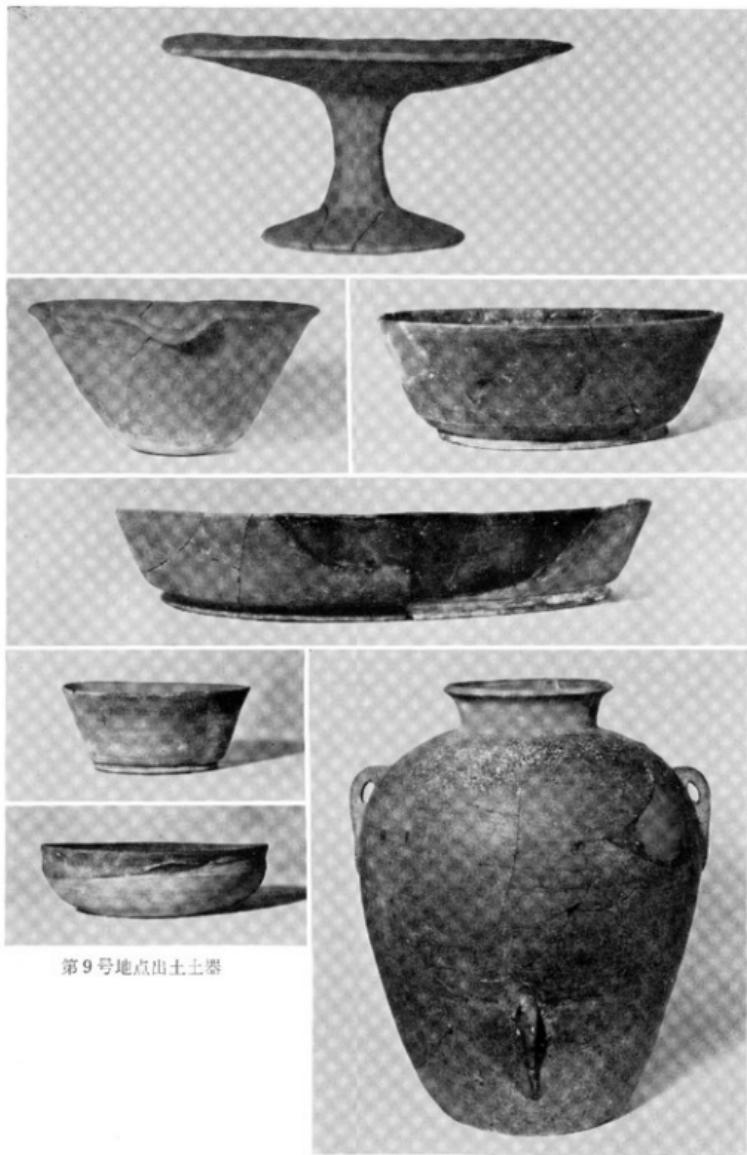
4 A-3 トレンチ

西から



第 9 号地点出土軒瓦

图版 6



第 9 号地点出土土器

昭和49年3月31日

発行 奈良県教育委員会

印刷所 奈良明新社

